外国語活動・英語科における「学び合い」の諸形態

英語科は，他教科に比べて「学び合い」が難しい教科であると言われる。典型的な学び合い学習の光景は，児童・生徒が少人数のグループを形成し，互いに対等の関係で意見を出し合い，そこから何らかの結論を導く，というものである。しかし英語科は，生徒個人の知識・技能の差が現れやすいため，生徒同士が対等の関係を築くのが難しかったり，コミュニケーション能力の育成を目標とする「技能教科」であるため，意見を出し合う場面を設定するのが難しかったり，といった理由により，学び合い学習の効果に疑義が呈されることも少なくない。また，始まったばかりの小学校外国語活動での学び合い学習については，ほとんど議論されていないのが現状である。

しかしながら，上の典型的な光景は，学び合い学習の一つの事例に過ぎない。例えば，学び合いの人数構成，学び合いによってつけさせたい力，児童・生徒間の関係が次のような変数として与えられると，これらの組み合わせにより，実にさまざまな学び合い学習の形態があることに気づくであろう。(i) グループの人数構成：ペア・少人数集団・学級全体； (ii) つけさせたい力：思考力・判断力・表現力；(iii) 児童・生徒間の関係：対称的・非対称的。今後の議論の活性化のために，外国語活動と英語科の「つけさせたい力」に関してどのような学び合い学習が考えられるかを整理したい。

【思考力】英語科における思考力は「文法的なルールに則って考えることができること」と定義される（教科の構想を参照）。この力の基盤となるのは，文法・語彙に関する知識であり，その理解の過程では個人の学習に負う部分が大きい。しかし，基礎知識の定着を図る段階では，従来からペア活動による学習が活用されてきた。これも学び合い学習の一つの形態である。また，学習した文法事項を整理し，さらに発展させる段階では，少人数集団による学び合いを利用することもできよう。一例として，現在完了形の学習の最終段階で，過去形との違いを少人数集団で話し合わせ，そこから使い分けの規則を発見させる，という実践を附属中学校では行ってきた。さらに，小学校の外国語活動では，身近な外来語などを用いながら，日本語と英語の違いについて少人数集団で，さらに学級全体で意見を交換する活動が考えられよう。後者二つの例は，「文法意識の高揚」あるいは「ことばへの気づき」と呼ばれる内容であり，言語的思考力の育成において重要な役割を果たすものである。

【判断力・表現力】これら二つの力は，それぞれ「場面などに合わせて言葉を選ぶ力」「場面に応じた最適な方法で相手に伝える力」と定義される。したがって，これらは言語の実際の使用場面と密接に関連しており，その育成には，学習者に良質なアウトプットの機会を与えることが鍵となる。英語科でも外国語活動でも，ペアによる（あるいはペアを次々と入れ替えることによる）言語活動が取り入れられているが，これ自体が学び合いの一形態であるといえよう。また，その際に重要なのは，言語活動の後にふりかえりを行い，語彙の選択や声のトーン，顔の表情や身振りなどに関して児童・生徒が気づいたことを，少人数集団あるいは学級全体で共有することである。特に，使用できる言語表現が多くない外国語活動においては，非言語的表現力の工夫を促すことで，コミュニケーション能力の素地を養いたい。ふりかえりによる学び合いを充実させることで，判断力や表現力に関するさまざまな工夫を「わざ」として意識化させることができる。

上で示した思考力・判断力・表現力に関する学び合い活動では，児童・生徒間の関係が対称的である。すなわち，英語運用力にあまり差がない方が好ましいことは確かである。しかし，特に中学校の英語科では，あえて学習者間の非対称的な関係を利用した「学び合い」も可能かもしれない。スローラーナーがファストラーナーから学ぶ関係を上手に作ることができれば，後者は前者に教えることで自身の知識を定着させることができ，双方にとっての効果が期待できる。この種の学び合い活動を成功させるためには，スローラーナーとファストラーナーの間に良好な関係を築くことが必須の条件となるが，これは学び合い活動全般についても当てはまることであろう。その意味で，学び合い活動は，教科指導と生徒指導の接続部（インターフェイス）といえるかもしれない。

（共同研究者：島根大学教育学部言語文化教育講座　縄田　裕幸）